

||||||| 紹 介 |||||

経済学方法論

—— 上向と下向に関して ——

見 野 貞 夫

経済学の再構成方法論のなかでいわゆる上向と下向の相互関係、この特異な構造をめぐる問題は、内外とも、またマルクス経済学プロパーか、更に新しい経済関係の解剖学としての社会主義経済学かを問わず、古くからあって論争もたえなかったけれども、それがとくに積極的にとりあげられひろく論述に付せられほり下げて、展開をみたのは何といても、ここ20～30年間の社会主義経済学の理論構成という作業に結びついた実際的必要からであった。アカデミー経済研究所の経済学教程をはじめ、共著や独著を含めて多くの教程がそれなりにこの方法を駆使して作られ出刊されてきた今日でも、教程の内容が十分でない以上は、なおこの方法論に関する議論はつづくようである。しかし、どちらかといえば、このテーマは、アカデミズムが主としてとりあげるところになっていて、大学など専門研究機関の紀要にのることが多い。以前からのものを含めると数も多いが、最近のものにして、めばしいものをひろえば、次のようなものがあげられよう。

Э. В. Ильенко : Проблема абстрактного и конкретного, Вопросы Философии, No. 9 1967.

К. П. Тронеv : К вопросу об абстрактном и конкретном в политической экономии, Вестник Московского Университета, No. 4 1972.

Е. Лавров : Соотношение абстрактного и конкретного в системе производственных отношений социализма, Экономические Науки, No. 1 1973.

В. Радченко : Об исходной категории политической экономии социализма, Экономические Науки, No. 5. 19675.

А. Еремин : Общий путь познания и методология политэкономии социализма, Экономические Науки, No. 8 1975.

Н. Хессин : Некоторые методологические вопросы “Капитала” К. Маркса, *Экономические Науки*, No. 8 1976.

М. Гвелесиани : К вопросу логики “Капитала” К. Маркса, *Экономические Науки*, No. 9 1976.

ここでとりあげるのは、前掲のよりも新しくそして同一テーマをあつかっているトロネフの次の論文：

К. П. Тронев : Еще раз к вопросу абстрактном и конкретном в политической экономии, *Вестник Московского Университета*, No. 5 1975.

である。両者は同一のモスクワ大学紀要にある。さきの論文がのったとき、かれは生きていたが、あの方の方は遺稿としてのせられている。75年4月逝去。まだまだ若い40代の経済学者であり、惜しいかぎりである。以下とりあげようとする遺稿論文は、75年4月、モスクワ大学経済学部経済学講座方法論演習の総括を資料としてかかれたものである。演習は73年12月から74年3月の期間にわたった。そこでの検討議論の文献材料になったのは生前発表のかれの論文とユードキン論文 (А. И. Юдкин : О методе политической экономии) である。

紹介論文中にいくどか挿入文節をもって疑念を表明したことからも分かるように、この論文でもかならずしも的確とはいえぬ問題点がすくなくない。が、論文をいっそうほり下げて研究していくためなり、私説と対決させて理解を検証するにはもってこいの材料として役だつのはたしかである。

ここでは、かれの理解を批判することが目的でないので、論評は禁欲せざるをえないが、それでも、以下の紹介を補足する意味からも若干の問題点を次に指摘しておかざるをえない。

第1に、かれの議論の主眼点は抽象から具体によじのぼる上向が科学的だというばかりではなく、これを補足して、通常は非科学的といわれる逆の下向もまた科学的だということにある。しかし、つらつら考えてみるに、区別すべきはずの二つの問題点が不用意にもとりちがえられてごっちゃにされているのではないかと思われる。その問題点とは、一つには科学システムの編成。科学の組成には下向もはいろいろしいれねばならぬということ、もう一つは運動の軸心、展開のバネといった決定性をフォローする点に本性をもっている科学的という状況性格。一口にいうと、何が科学の組成をなすかという問題と、科学とはそもそもいかなる状況かといった問題が混同されているように考えられる。

ところで、ある事項が前者でみとめられたからといって、同一の事項が後者で是

とされるとはかぎらない。具体から抽象への下向は科学システムの部分品であるが、科学的だとはいえず。月は地球や太陽を含めて、太陽系の諸惑星群をなし、熱、光、……のシステムの中に位置づけられるが、だからといって、月や地球が自生的に光や熱を生み出すのではない。それは太陽だけの機能である。また、資本家や地主は労働者ともども資本制社会の成員であるが、だからといって、かれらは労働者と同種の資格でこの社会を支えているわけではない。いわゆる近代経済学は私有財産社会の自然（歴史自然を含めて）と人との関係を取りあげ支配者の抑圧任務にふさわしい維持・保全の社会局面を研究して、もう一つの側面たる人相互の関係という、批判的革命的そして流動的な運動局面をほかの経済学（科学的方向）に委ねて分業にもとづく協業をおこなうのである。この社会の所産として二つの方向が生存権で平等だとはいえても、そこから近代経済学にも上述の意味の科学としての権利を与えるのは正しくはない。近代経済学は科学的なのではなく科学組成のシステム因子でありモメントだというにすぎない。こうした例から具体から抽象への方向に関する議論も一体どう処置すべきか大方の目安はつくだろう。最後の例はたんなる比ゆ以上の実質的な関連を有する。下向は、上向の所産であり余影であり派生運動であるかぎり、存在理由はあるにしても、社会を動かす筋道にはいささかもかわらないという点に注目したいものである。

上向と下向を科学の編成に有機的にうつつだす以上、この反映母胎たる対象的實在の運動にも即応的にこの2方向がみとめられねばならぬはずだが、かれは、実際、不十分ながら、これをみとめている。實在と科学、またはかれの表現では、歴史と論理——その各自について上向と下向の相互に補足する往復運動を的確にみとめるようであるが、相互関係として総体的に考える段になるとどうしたわけか、この2方向が各組の2項目に択一的にわりふられて、歴史には下向、論理には上向がそれぞれ特有にまつわりつくかのように位置づけられる。個別的には正しく二つの筋をとらえるけれども、全像ではあいまいになり択一的になる不当さが生じるのは多少とも實在の運動相にねざすが、その相は現象形態でしかない。つまり一つの商品は使用価値と価値の統一であるのに、これが二商品になると、択一的にそれぞれ使用価値と価値の分業関係が形成されると類似の現象である。しかし現象にたじろぐ必要はすこしもないしあってはならない。かれにあっては、現実と實在、論理と理論、の混同があり、一面、歴史が實在に一面化して解消するかと思えば、否、そうするがために、歴史の一局面たる観念の歴史を思惟（理論的作業）とごっちゃにする。實在は、現実（的）というコトバを客語とする主語である。しかし、この現実

を眞実 (real) という意味と眼前にあるという actual とから成りたつという自覚、両者の区別はかならずしもない。が、いまはこれを問わないでおこう。

現実の構造は、このようにして、1. 実在、2. 科学、そして3. 理論構成・思惟、の3局面から成立する。1. 2. が歴史を構成するので、実在に限定されずに理論史をも含む。この2項目の相互関係は比喩的には物体と鏡の関係にある。一方にあるものは他方にもかならずある。しかし、これは人間の努力を客体として足跡をみる観点からのとらえ方である。これに反して、思惟は主体的に創造的にまえてその歴史をうつしとっていくのである。一方は発展の内在法則に着目して、上向と下向を不可分に結びつけて含む論理だとなると、他方はこれを所作的にうつしとった理論となるだろう。しかし、論理は理論にも貫徹して、ここにも上下向を再現する。だがしかし、トロネフは3局面でなく、理論構成を排除した2局面しかみとめていない。理論構成を実在にたいする科学とか、かれなりの論理とかに重ねてしまっている。制約される決定因と決定される制約因の弁証法的な相互関係はすべての歴史にあるだけではなく、その歴史を分有する論理と理論の間にも再生するというべきだろう。かれは弁証法を論ずると主張するほどには、こうした弁証法の基本構造を明確に述べてはいない。かれの用語をできるだけ用いていえば、歴史と論理の2局面の外に、論理のなかに理論構成（思惟作業）をも付加すべきであろう。そしてこの3局面で上向と下向の往復運動を確証すべきであろう。以上が、かれの所説に感じる第2の問題点である。それについて、いますこし補足して述べておきたい。

前述のことを、いま角度をかえてかれが同論文最後のくだりで要約している項目にそって再考してみよう。

まず、歴史と客観的基礎過程の意味における現実との1組にたいして、もう1組を、論理とこれと同一視した理論として区別して対置する。しかし現実=実在は、たんに基礎過程にかぎられるわけではなく観念の存在も含むはずであり、まさに歴史と同一であり、更には、思惟にもあるからして、およそ存在するもので現実=実在ならざるはない。しかし、思惟は所作件であり所与件でなく、同時作業であり、ポステリオリでないので、この点で前2者がそれとつみこまれる歴史の痕跡を保有していない。しかし、実在性格では何らかわらない。観念や思惟にかかわるということだけで、歴史性をもつ観念所産と、その社会構築を主とする理論作業がかれのいう論理のうちにおしこめられて、異夢同床の弊におちいつている。しかしこの点を不問に付して先に進もう。

歴史の核が基礎過程としての現実であり、論理を生みだすバネが（歴史の軌跡を

えがくのが社会の活動だから) 理論だということを自覚した上で、歴史=実在は論理=理論を生みだすが、逆にこれに制約をうける運動と結果の相互関係をもっている一方、同時に所与件と所作件の、または核心と外皮の相互関係に歴史—論理と現実—理論がある。何が何を動かし何がどこからでているかは前者の相互関係でみなくてはならないし、何が何をつつみこみ、何が何を外皮として位置づけるのかは後者の相互関係で定まる。この2面の相互関係で決定的な軸になるのは基礎過程としての現実=実在である。この点をかれはあいまいに指摘する。

このあいまいさにとどまらない。更にまずいことには、因果の連鎖につらなる歴史=現実と論理=理論にそれぞれ下向と上向とわりふってしまうので、所作件としての現実—理論からは現実の上向と理論の下向が脱落するし、所与件たる歴史—論理からは現実の論理と論理の歴史が欠落する。

しかしながら、最後に、歴史と区別した論理のなかに再び歴史的なものと論理的なものを区別し、さきの論理を研究方法とし、この論理と歴史が広義の意味であり、弁証法の構成側面として対立物の同一性を示す一方、また再別された、研究方法の2側面を狭義の歴史と論理にする。この論理は、理論構成のことであるから、広義の2側面に上向と下向をみとめるならば、狭義の論理内の歴史ともども、理論のなかに、上向と下向が内在していなくてはならぬし、かれは自覚的に広義の論理と、狭義の論理つまり理論とに一樣に同一の方法を貫徹させる。狭義の歴史が観念の所産を含んだものとして、その論理も理論におきかえて、2つともそれぞれに上向と下向をみとめていくと、かれの整理も3局面構成に近づくのであるが、この歴史が観念を含まないのだとするならば、狭義の論理を細別して論理の歴史と理論構成の2側面として、それぞれに上向と下向を付着しなくてはならないだろう。この点、かれはあいまいである。

このとらえ方を、かれはラッキーにも、科学システムに下向がはいるとする次元でみとめる。なぜにラッキーかといえは、下向もまた科学的だとかれはするものの、これを科学システムへの編入とごっちゃにして、この問題のひろがりであらう決定的な誤論や不合理な駄弁から偶然にも救われることになるからだ。具体から抽象を科学的だとする場合の科学とは、かれの場合、科学システム組成の上で、これと重ねてとらえられるために、誤論がそれだけあいまいにされるので、不合理さも是正されるために、決定的誤論からまぬがれるのであるが、誤論一般から脱却するものではない。

トロネフには、3局面に上向と下向を認めない不徹底とか、歴史と論理の2局面

では二つの筋道を各自みとめるが、2局面全体としては捩一的に上向と下向をわりふる欠陥などがあるとはいえ、混乱しつつも問題点をふかめようとする意欲はある。ソビエトの文献にはがいして、捩一的付与を特徴として平凡な水準にとどまっているものが多い。その見本例を、紹述前に別論者の論文^{*}からここに紹介しておこう。

上向と下向が歴史を共有する——基礎過程と観念生産の二つに無差別に内在することは偶然ではなく、後者は前者を、形態の相異、積極的な否か、はたまた前兆的にか事後的にかを問わず、所詮うつしだし秩序をもって吸収するからである。上向と下向を観念生産と基礎過程に捩一化するのには正しくはないけれども、通常の文献はこの弊が多く、この解釈に批判的にして二つの歴史にこの上向一下向をみとめる見解も、ときとしてこの幣にカムバックするありさまがなくはない。そこで以下、ちょっと、上向一下向論の代表平均的見解としてヘッシンの所見をすこしばかりフォローしつつ、若干のコメントを加えておきたい。

かれによると、弁証法を、対象にせまる一つの見方 (точка зрения) とするブハーリンを、弁証法の歪曲ゆえに、レーニンは、これを批判したのであり、そして見方をこえて、その運動実在性を強調したのである。かれはレーニンをよりどころにして次のようにいった——

‘すべての人間史は対立物の統一闘争、否定の否定、量的変化の質的变化への移行、また逆の移行を通しての——簡単な形態から複雑な形態へ、低い形態から高度の形態へと発展する歴史である。弁証法的方法はこの世界の客観的弁証法の科学的な反映であり、本質的にいって、歴史的である。特定形態の生成・発展・死滅の歴史なきところで、弁証法を語るのは弁証法自体を否定することか、あるいはそれを、純粹に概念のあそびなり生活に結びつかぬスコラ主義で考えることを意味する (Хессин: там же, стр. 6)

‘唯物弁証法の方法は、本質上、論理的なものと歴史的なものが内的に統一されている方法である。対象の“論理”は現実史がはじまるところからはじまる。もちろん、論理が歴史を再生するといっても、その生活全体でなく、偶然性をとりさった内的に必然的な合法則的形態においてであって、この点からすれば、論理的なものとは歴史的なものは一致しない。けれども、両者は一つである。’ (Хессин: там же, стр. 5) 弁証法をブハーリンは対象の発展論理とせず、見方とみなして、現実

* Н. Хессин: Об исторически-генетическом подходе к исследованию системы производственных отношений развитого социализма, Экономические Науки, No. 6 1975.

求めない」と。

ヘッシンのいう通りにちがいはないのであるが、しかし、弁証法が人びとにかかわりなく (вне нас) 存在する客観的なものの発展していく仕方だという所見 (Хессин: там там же, стр. 5) と、弁証法が歴史を含むのであるから、わざわざ歴史主義 (историзм) と弁証法を区別するのは不当だという所見 (Хессин: там же, стр. 6) はスムーズに完全に両立するだろうか。一方はきびしくいえば、人間のあるなしと無関係に存在する世界であり、他方は明かに、人間のいる世界である。人間がいてもいなくても客観的だというのはありうるので、人間不在だけが何も客観的なのではない。しかし、ヘッシンは後者つまり人間のいる現象を主として考えているようなのは全体としてよみ通せばすぐ分かることである。

ヘッシンによると、歴史と論理が一致しないと解釈は、「資本論」でマルクスが直接には一致しないと見解をとりちがえたところから生ずる (Хессин: там же, стр. 7)。「資本論」第1章で分析に付された商品は資本主義の史的先行形態でもなくて、はじめから資本の所産、資本制生産の産物であるといわれる。しかし、「もとより、「資本論」における研究対象がすでに生成し発展しきった資本制生産方法だというのは正しい。「資本論」において諸範疇の構成・配置・整序が発展しきった資本制社会ではたす役割に一致した相応性で与えられるのも争う余地のないところである。だが、そうだからといって、発展しきった資本制範疇の構成が同時に歴史的構成ではないということにはならないし、その構成といっても、発展した資本主義における一定範疇の位置だけではなく、その生産方式の生成・発展する現実過程の位置と役割をもうつしだすのである。」 (Хессин: там же, стр. 7)

ヘッシンはかならずしも、明示していないが論理にも、そして観念と基礎過程を含む歴史にも、上向と下向があるとして、まず論理と歴史をとりあげるが、更に歴史内部の二つの層にもこれをみとめるようである。レーニンにしたがって、かれは研究方法と展開方法に分け、これを具体から抽象への方向と抽象から具体への方向に二分してわりふる。かれによると、マルクスは後者の方向を唯一の科学的方法だとはしたものの、かれにはもう一つの前者の方向もある。補足し合う客観的なものであり、対象・歴史・基礎過程が二つの方向の存在ばかりか、存在の相互交差をもっているところからして、二つはどこでも一体不可分である。一面的に狭隘だとはいえ、上向がなければ、原則として、対象に内在する発展の客観的論理という弁証法をうつしだすことはできない。だから、研究方法を具体から抽象の方向に限定してしまうことは混乱を生ずし、これでは全システムは相互に結びつきを欠いた

個々の部分に分岐するだけである。この限定でアバルキンは批判されなければならぬ。これは前稿で述べた。まったくの表象が抽象的規定に転化して修正をこうむっていくのが下向過程であり、一切の認識段階ごとにこれが必要であるけれども、一定のかぎられた範囲内でのみ問題を解決するにとどまり、内的に必然的な、発生的に発展合法則的な関連や全体システムの関係、そして生成・発展・死滅の弁証法といった主要課題を解決することはできないのである。(Хессин: там же, стр.7)

マルクスの前述の規定(手稿資本に関する章で一般的なものを説明したところ)からは、次のこと——すなわち普遍的形態は多くの対象がもつ共通の属性をつかまえる思惟の形態であるのみならず、独自のもの個別的なものの諸形態とあいならんで真実に存する形態であるという結論をひきだすことができる。それは固有に現実の内容をもっている。マルクスの“資本論”で商品は同時にブルジョアの富の抽象的なエレメンタル形態としてあらわれるし、“もっとも簡単な経済的具体性”としても、つまり固有なそしてきわめてゆたかな内容をもって、他のいっそう複雑な具体性、貨幣資本その他とならんで存在する形態としてもあらわれる。

こうして、経済学を理論的に構築していく起点範疇たる普遍的なものは、思惟抽象であるとともに、特定の実在的な内容を有する形態として、二側面を保有している。

また、ヘッシンによると、資本一般をマルクスは、すべての資本に共通した属性の性格とするが、他面では独自の現実の資本とはちがう存在をも有するとしている。これが歴史と論理の照応の保障となる。すなわち、その資本一般は資本主義の内部で商品生産の関係がもつ位置と同じ性格を、資本そのものの内部ではたす。そこで一般的なものは思惟の抽象であるとともに、現実態であるとするならば、資本一般も思惟の抽象形態、あらゆる資本に内在する共通性格であるとともに、自由競争時代にそのアクチュアリティをもっていた。

つまり、上向と下向が歴史では包摂される二つの局面——観念と基礎過程のおのおのにまつわりつくものの、このなかで決定的に重要であり、運動の側面なるがゆえに、内的関連の発生的理解と全システムの把握は上向のみによってはじめて可能であり、下向はその各段階で認識を与え一定の部分問題を解明する任務にして、唯一の科学的方向たる上向を補足するのだというわけである。しかしながら、同じ観念の領域に属しながらも、歴史から論理を、つくられたものからつくるものを、足跡と行為自体を、一口でいって、与件から所作件を区別して、それぞれの後者を独立のものとするところの、理論構成の作業を細別していないし、またこれに上向と下

向のかれの前述した構造を貫かせてはいない。観念の把握と理論作業が明確に区分されていない。

また上向と下向を相互補足としたところから、たとえば上向の起点としての抽象と下向の終点としての抽象が重なり円環運動を完結するところから、終点なり始点における自己復帰が形式的に抽象的であるとともに普遍的であるとか、一般的であるとともに独自の個別的であるとかといったふうに、無雑作に形容詞が重ねられてしまう。同一物がどの筋道や局面で普遍であり、どの筋道や局面で個別であるのか、一つで抽象であり、他では具体的なのはどうしてかを分別して確定していないきらいがある。この点は、かれの他論文への評定ですでに批判済みである。

ヘッシンは上向一下向の方法論議を、社会主義経済学の再構成の骨格模索として、二つの論点に結びつけて論じようとするのであり、つまるところ理論の展開起点としての範疇^{*}は何かの問題^{*}に収斂するわけだけれども、ポリティカル・イコミーをも含めて経済学一般の方法論ももりこまれている。かれは、別の機会に論じておいたように、起点範疇、したがって社会主義経済関係の集約を計画性に求めるいわゆる計画性説を主張する有力な論者の一人である。

因みにいえば、計画性説の説く一般的概念としての計画性に異論をとるむきがあるのは、かれによると、一般なり普遍なりの概念についての誤解があるからで、形式論理学ならば一般は個別を含まず、相互に無縁であるどころか、相互に排除するはずである。が、弁証法ではこの二つは相互に不可分に関連しているのだと。

これに関連していえば、チェルニャクは社会主義経済の商品関係に新しい内容と古い内容が区別されると考え、新しい内容は社会主義の諸関係から固有に生ずるのであり、新旧全体としてこの生産諸関係を形成するのだという^{**}だが、このシェーマは、商品関係に新しい内容が加わり、加えられた内容形態が本質にしんとうし定着すると解する見方であり、われわれにはすこぶる疑問である。もともと、かれは“商品生産の独自性”とか“特殊の商品”といったあいまいな概念の批判にはやぶさかではなく、前者を同一の本質（旧社会のもの）を前提とした独自性であ

*起点範疇と確定すべく、まず旧社会の分析、とくにマルクス“資本論”冒頭の範疇がとりあげられて、ヒントを与えるものとして、検討されるのが常である。(В. Шкредов : Товар и товарное обращение как предпосылка анализа процесса производства капитала, Экономические Науки, No.6 1975)

**В. Черняк : Вопросы системного анализа экономических отношений, Экономические Науки, No.10 19675.

り、後者は、マルクスが貨幣を特殊な商品としたように、新社会の諸関係を反映しているのだと考える。この点では議論の綱目をゆたかにするものの、商品生産はやはり私有の社会に特有な一つだけの関係であって、私有外に他の諸社会でも新しい内容が加わっていろいろとあるというものではない。したがって、社会主義経済には原則として理論上は商品生産はない！もし現実にあるとすれば、それは、旧社会からの遺産であり、支配の関係をのりこえる方向での（価値から生産価格のように）モディフィケーションでなく、逆にその関係を足をひっぱる方向での（費用の価値へのレベルダウンのように）モディフィケーションであり、更には、私有がしめてくる内部諸関係が完全に克服されていないことを如実に物語るものであろう。つまり、それは一国社会主義のひずみであろう。

また、国民経済では計画性が、企業レベルでは商品関係がそれぞれ固有にまつわり存在するという見解も、本質は計画性だが形態は商品的だとする考え方も正しくはない。

もう一つの関連項目としてチェルニャクによって、あげられるのは、社会主義経済学の再構成において、システムをもったアプローチと弁証法は対立するように考えられるようだが、けっして対立するものではなく、まさに弁証法はシステムアプローチに外ならないというヘッシンの見解である。これが形式的なシステムをもったアプローチとちがうのは、構造主義や機能主義^{*}がそうであるように、相互関連が依存性をこえて、それがいかにまた何ゆえに生じるかを問題とすることにある。それはシステムをもった弁証法的方法である。

多面的アプローチが必要だという点からして、チェルニャクはこう考えるように、シェーマが多くないといけないということにはならないし、分類基準をふやして生産諸関係の аспекトを多く区分する必要もなく、まして аспекトに照応するシェーマが同時に科学的意味を有しているのだともいえない。

第3には、上向—下向、抽象—具体などのセット内相互関係が存在として説明されるだけで、それが歴史を含めて実在とか、思惟が含めて観念の所産に、または理論作業を含めた表象にいかん貫流し普及しているのかを凝視する考え方に乏しいのではないかという点である。まず一つには、方法論は歴史学とちがって能動的行為として组成的に（形成的に）たちふるまわねばならず、この点でこそ大切なメリットをもつはずである。だが、客観性や現実性を強調するあまり、いささか観想的に

* 構造主義分析の批判としては A. Франк *Функционализм, диалектика, синтез* в кн. Структурно-функциональный анализ в современной социологии, М. 1968.

なっていて、精彩を欠き何か物たりぬ印象を与える。というのも不思議ではなく、能動的な自己形成ぶりが実証できるはずの理論構成を歴史＝実在に埋没させて、独立の部門として区別していないからである。

もう一つ。たしかに、上向と下向を、具体全に内在してささやかな発現しかないが、しかしバネを保有しているところの抽象的モメントがひたむきに発展する方向と、具体全が抽象的モメントの同一色調で再着色をうけこのモメントに定着する方向とにそれぞれほりあてる点では正しい。また、上向と下向が相互に往復してはじめて自己を完結する運動であるがために、一つの点たる具体全にとっても、もう一つの点としての抽象的モメントにとっても、運動の筋道は到来と発足の二つあるから、トロネフは、具体全にひきつけた出入の2方向と、抽象モメントにひきつけた出入の2方向を明確にきめ細かく論じている。これも一応は是とできる。だがしかし、一つの具体全からもう一つの具体全への移行をも下向と考えている。封建社会から資本主義社会への移行は全体を単位とすると、くらがえであり軌道修正であり、下向なのである。しかしこの下向は、一つの具体全を前提とした下向でなく、その具体全を構成単位とするいっそうひろい具体全、あるいは単位具体全全体のなかでの下向であり、同一具体全の範囲外にでた議論となってしまう。そうした具体全の全体には、たとえば私有社会なり階級関係が考えられよう。下向かうんぬんされるこの二つの具体全は関連はあるものの区別される別のことがらであるが、重ねて解釈されている。一つの具体全からもう一つの具体全への移行は下向であるには相異なるが、その下向が同一具体全内部の下向とどのような結びつきで生じているか——この点をほりさげて研究すべきであろう。つまり歴史の興亡と、一定社会での歴史の趨勢——この両者をつなぐ中間項の諸層組織を確定することが肝要である。

最後に、いま一つの点。その作用＝定位の局面に関してはかならずしも的確ではないが、上下2方向の存在だけではなく、その同時存立と交差構造の必然性をもかれは述べる。下向は上向と一体になって生じるというわけである。これは正しいのだが、上向に関して、さきの論点の下向における欠陥と双対をなすもう一つの欠陥がまつわりついているように思われる。かれは、具体全の抽象モメントと、具体全そのものがこのモメントと同種の性格をもっていてそのなかでの抽象モメントをなすものを区別するものの、いずれも抽象としてとらえる。一方は抽象モメントの性格と同一か異質かと問わず、その内層をこえてひろがる範囲での抽象であるとする、他方はこのひろがり同質の性格に限定された、内部の抽象であるといえるだろう。端的にいうと、前者は全私有社会の商品生産、後者は資本主義経済の商品生

産であろう。ところで、二つのこの抽象的普遍のうちで、前者はもちろんのこと、後者についても、ほかの具体全にたいしてはこれは抽象的独自となる。これは同じ現象たとえば商品生産、したがって私有内部のできごとに関しており、ここで資本前社会のしぼられた現象と、資本主義社会でのその現象が弱々しく区別されるだけである。ところが、私有の、商品生産の社会と、これをのりこえる社会との間にことがらがひろがると、この弱さは、再びあらわれて、混同まがいの論述となる。すなわち、二つの商品生産、抽象モメントを抽象的普遍と抽象的独自と特徴づけるが、すでにかれば、地代や剰余価値など、剰余生産物の諸形態を抽象的具体とし、剰余生産物を抽象的普遍と述べた。つまり、さきには私有社会の内部において因果の二局面を分担する抽象の普遍と具体を、私有とこれをこえた社会にそれぞれこっそりと付着させ重ねつつ理解する。資本前の現物経済およびこれに制約された商品生産と、この内在規制因である、資本主義経済の細胞としての商品生産を区別した概念——抽象的具体と抽象的普遍が、地代やその開花形態である剰余価値と、これを貫徹する剰余生産物を区別したも同一名のしかしもう一つ概念——抽象的具体と抽象的普遍が二重うつしになってとらえられる。歴史的に内的な規制因ということと、現象の本質として、いずれ現象を克服して自己に似せる変革という内的規制因を無思想にも混同するか、あるいは明確に区別していないことである。前者は前史内のこと、後者は前史と本史にまたがる。

かれによると、抽象的普遍は抽象的具体、更には具体全となって自己の任務を完結するというのだが、そうすると、歴史貫通的な内的規制因——抽象的普遍としての剰余生産物も前史には地下生活をしいられるが、この地平の外では抽象的具体を通してやがて歴史形態として、具体全として現象せざるをえないということになる。しかし、かれの与えた一つの立言がもう一つの立言をのみつくす点では、混同や錯乱でないまでも、一つのとりちがえをおかしていることになる。また、歴史動学の眼をもってすると、任意の社会にはいつどこでも抽象的具体と抽象的普遍があつて、後者は、パラメトリックに社会を変化させるが、それが変化するたびに自らも変化して抽象的独自に転成する。転成のために抽象的普遍があり、この反復が歴史過程。歴史は休止しない。したがって抽象的普遍はあとからあとから湧出してこの転成の出番を待たざるをえない。しかしはたしてそうだろうか。

一見すると、歴史貫通的にえがきだされた抽象的普遍としての剰余生産物が抽象的独自に転化するという文言を額面どおりにうけとって、これがあてはまる史実性を求めれば、資本主義から社会主義への移行とその確立の過程において、価値から

発足して費用の、そして共同剰余の確立として考えられる。おそらく、かれの主観からは Political Economy にかぎって述べた発言が思わず、Political Economy ともどもこれをこえた Communal Economy とそれをつないで全史の過程にもあてはまる結果になっている。かれの剰余生産物は、同じくかれの論理である抽象的普遍の抽象的独自への転化を通して、その形態規定、われわれの用語では、共同剰余として現象してくるのである。以上は私見である。

* * *

科学的思惟にとって、最初の起点運動として、具体から抽象へ方向をみとめない論者は、何かといえば、“経済学批判要綱”と後日編者が名づけたマルクスの手稿（1857～59年）序説の文節をひきあいだす。だがよく考えてみると、この照応はまったくあたっていない。マルクスが誤りだとみなしたのは、個々のフレーズならず全体のテキストをよみきると分かるように、具体的全体をすぐさま概念として研究することであって現実の具体的全体から発足して一面的関係に向って運動しもっとも抽象的な概念を確定することではなかった。むしろ、この確定は、研究の発端で考えるのだから、抽象のことであり、これは認識にとっては絶対的に必要な段階ですらある。この抽象は、内容なき抽象、マルクスの用語でいえば、たんなる文字ではなくて、内容ある現実の一面的関係をもっとも単純化した規定である。こうした抽象の例として、マルクスは分業・貨幣・価値を考えた。次いで、もっとも簡単な諸関係（範疇）から発して、思惟は具体全に推移しその全体概念を解明していく。

この点、マルクスはこういった——簡単な範疇たとえば労働、分業、欲求、交換価値……から国家への上向は唯一の科学的方法なのであり、思惟できる具体全体を認識するありうべき方法である。資本制社会から発足してその個別的側面、つまり分業、貨幣、価値、交換価値その他へと向う思惟の運動を認識する場合、この認識は同一の具体全を解明しない。さしあたりは全体でなく、個別の質なり一面的関係、また個別の特殊な本質や法則の確定として、この認識はどう具体全にかかわるであろうか。

具体を抽象に還元する方向は、具体において内的に統一されているすべてのエレメントを全体として認識することである。が、この方向は科学的でないのだろうか。マルクスはこの方向もまた科学的だということを前掲手稿のなかで述べている。たとえば、かれのいうには、17世紀の経済学者は具体から抽象への道をたどっていたが、まさにこの年代にブルジョア生産諸関係の内的関連をさぐったペティ以来の科学的ブルジョア経済学（古典経済学）が胎動を開始したのであり、この年代を通り

ぬけて、スミスやリカードの理論が生成してくると。マルクスが積極的に評価した抽象から具体への上向については、古典経済学の最良の代表者たちのもとですら、それは現実的内容や成果をとまわらない純粹に形式的なものであり、これをマルクスは経済学史の観点から評価しただけである。マルクスによると、リカードの發生的方法に関しては、ちょっとみただけで、経済学史におけるこの方法の歴史的正当性や科学的必然性ともども、科学的不正確さは歴然としている。つまり、リカードなどのもとでは、一つの範疇からもう一つの範疇をひきだす、いわゆる發生的方法とは、一般法則から直接じかに、これに呼応した具体的形態なりモディフィケーションを、その媒介環や中間項を通さないでひきだす点で決定的な欠陥をもっている。古典経済学に本質上、真に適用できる唯一の方法は具体から抽象に向う分析的方法である。古典経済学は、内的関連の多様な形態と区別してその全体をつかむべく、いろいろな相互に疎遠の形態を内的統一性に還元しようとした。たとえば、地代を超過利潤に包摂する……など。具体的形態を内的な統一性に還元する分析過程が形態の内的統一の認識であるとマルクスがいったからといって、驚くにあたらない。マルクスは明確に、経済学の方法が分析の方法であって、範疇を發生的にひきだす方法ではないと、判定している。そして分析の方法は、批判と認識がはじまる方法であり、發生的方法の不可欠な前提とも考えている。

具体から抽象への思惟の運動をみとめぬ論者は、意識の有無にかかわらず、唯物弁証法を認識論に還元してしまうのであり、はては認識の過程に帰する〔現実の客観的世界に上・下向の交差する2方向があるのに、これを反映する思惟に上向のみをとらえて下向を考えないのは、ほかでもなく、前者、弁証法の基礎を、後者、認識論にすりかえてしまうことを意味するというのだろうか?〕。認識論と理論的な方法なり論理は同じではない。唯物弁証法は何よりもまず、客観的世界の弁証法であり、理論的な弁証法や論理にうつしだされるのであり、科学の概念をとりあつかうのではなく、現実在をとりあつかい、これをただ概念にうつしとるだけである。概念から概念をひきだしたり概念にはじまり概念に終るのは観念論でこそあれけっして唯物論的ではない。実在から概念をひきだす方法と逆の方法を折衷的に結合するのは失敗するにきまっている。いずれかをとらざるをえないが、正しいのは前者。

理論そのものは諸概念から成るけれども、理論の構築にあたり概念から概念をひきだすのは、既存の理論を研究する人や学者にとってだけ存在するのであって、その創造者にも、科学の形成過程そのものにもけっして存在しえない。あえてそうする人があるとしても、かれは実在の現象を研究する人ではなく、文献上の概念にも

とついで理論をつくる人であり、既刊10の作品から11の作品をつくる人である。理論上の予測や予見はちっとみると、既存の概念から新しい概念をひきだしたように思えるものの、実際上は、実在の現象を研究した結果であり、概念ではない。資本制社会から社会主義社会への転化の予見を、マルクスは資本制経済の諸概念からではなく、この社会の研究にもとづいてひきだしたのである。弁証法を認識論に（抽象と具体の範疇を論理的理論的な範疇に）帰着させてしまうとすれば、具体全から研究をはじめるとはできなくなり、概念と分析からはじめることになり、研究の起点には具体全はおよそ存在しない。存在するのはたんに抽象であり無である。科学が唯物論的に実在をとりあつかうのだとする以上、実在の具体全以外のものからは、何ら一つ科学ははじまらぬ。けだし、起点はつねに概念ならず、現実そのものだからだ。

抽象と具体全を、まずもって現実在のモメントとして、次いで理論的・論理的な範疇として考える必要があるだろう。実在の具体全は多様なものの統一であり、理論ではこれに照応して、多くの諸規定の総括としてあらわれる。実在の抽象は具体に服する属性であり、一定の具体全の一面的関係であるのにたいして、理論的抽象は規定内容のいっそうまずしい概念、簡単な規定である。抽象から具体への弁証法は実在の弁証法であり、概念のゲームではない。さもなくば、このようなソフィズム——つまり抽象とは私が何も知らぬ場合のこれであり、何らかを知っている場合のこれは具体であるというコトバのゲームになってしまうだろう。現実の具体全について研究のはじめに何一つ私が知らないならば、その概念はたんなる抽象であり、実在そのものとしての具体全はそこから抽象に転化せず、したがって具体全たることもやめてしまうだろう。

実在の具体全が現象であり、その抽象が本質だなどということはできない。外的形態と本質的過程を統一して全モメントを包括する具体全は多面の統一であるのだから、すべての一面的関係を服従せしめ、個別モメントの間に一定の役割を配分するといったふうになるのかといえ、まったくそうではなく、ある抽象的モメントは現象の役割であられ、他のモメントは本質の役割をはたす。一つはいっそう表面的な現象と本質の役割において、他はいっそうふかい現象と本質の役割において（価値法則と生産価格、生産価格と市場価格など）、役割の分配は生じるものの、遂行因の関与がなくてはならない。後の関係はその属性を生み出すのではなく、明確にし現象させるのである。たとえば、全体のシステムにおける一定の範疇（物）があらわれる位置と属性は、固有な内容、つまり潜在的にかくれた属性と矛盾に依存

する。

何人かの論者によると、マルクスの範式は一般的なものにすぎず、生成したものはつかまえられても、その運動過程のすべてを理解することはできぬと。だが、これは誤解である。もとより、一切の現実の可能性が現実のモメントを含んでいるにせよ、可能性においてこのモメントが機械的形而上学的にあらわれるならば、可能性を現実性に転化したからといって、新しい属性の出現はみられない。どんぐりの実が潜在的にかしの実だというのならば、このかしはどんぐりのなかに存在するのであって、量が少いということはどうでもよい。どんぐり実のかしへの転化は可能性の現実性への転化であり、同時に、生成過程、つまり現存属性はもとより、いままでなかったほかの属性が生成する過程である。一定の物が自己の中にある属性(の可能性)を支配しないかぎり、他の物とどのような関係にもたたず、したがってこの属性を現実にしないうままである。

生成した具体全は、抽象にとって現実の基礎であり起点であるが、多様の統一物として、抽象的モメントを規定し、かつそのモメントをしてみずからをはぎとらせて自己の水準に高める。また、抽象的モメントは、具体全における統一と媒介を通してみずからをはぎとり、具体を全体として再生しきって、これに服する〔具体全はこのなかに含まれる抽象的モメントにたいして支配する制約因として働くが、制約されたその決定因は発展して、みずからの外的形態としての具体全をはぎとり自己が形態にまで高まるという、全体と抽象モメントの弁証法の相互関係を述べているようである〕。具体全も抽象も相互にとって基礎づけ〔根基〕であり、相互に決定的に対立するものの、同時に相互運動〔上下向の2方向のこと！〕の起点たり終点たるのがほかでもなく具体全である〔同じ程度で起点＝終点は抽象的モメント（一面的関係）についてもみとめねばならないはずである。具体の側には否定の否定があるから、それはたんなる根基でなく基礎でありしかも現実の基礎である。が、抽象は、一つのモメント、自己をはぎとる何ものかとしてのモメントにすぎず、したがって逆の運動においてしか起点とはなりえない。だから、マルクスはこういうのである——ブルジョア社会を全体として考えると、社会的過程の最終的結末として、つねに社会が、社会関係にたいする人間自身があられるということである。たとえば、生産物のように確実な形態をもっているすべてのものは、この運動においてはモメントとして、経過的モメントとしてあらわれるのであり、直接的生産過程もここではこのモメントでしかないのだと。实在の具体全における弁証法では抽象は現実の起点ではなく、せいぜい根基と基礎における規定性をはぎとる運動である。

抽象的諸モメントを具体全で規定する運動とこのモメントを具体全で止揚する運動——これは具体全の現実的*生活であり、史的発展の過程である。発展が進行する一定の段階においてこの具体全はもう一つの具体全に転化する。この転化の直接のきっかけになるのは具体からもう一つの意味における普遍的抽象への運動であるが、この二つの具体全に共通するのは歴史過程の継続と相続を表現するものとしての抽象への運動である。これは弁証法規定のいろいろな面の一つを形成する。それによると、古いものは新しいものを用意するし、新しい具体全は古い具体全の遺物から成る。この場合、次のことは指摘しておかねばなるまい。具体から抽象への運動は、1.一つの具体全からもう一つの具体全に転化していく現実史的過程の全内容をなすのではなく、むしろその転化のモメントの一つでしかないという点。2.その運動は $K_1-A-K_2^*$ といったふうに進行するのでもなく、また一つの具体全は独立して個々に生存を有するいくつかの抽象的普遍のなかで自己解消をとげ、しかるのちにはじめて新しい具体全にまで発展するといったふうでもないこと。自己に同質な属性を保ちつつ、本質的内容をもって両者の具体全にはいっていく普遍的な範疇・法則は必然的に、具体全のおのおのにはさまざまな特殊な独自形態をもたせる。だからこそ、マルクスは、史的にもっとも発展した社会組織たる資本制社会が死滅した社会の要素や残骸から成りたっているという一方、すべての社会形態に共通な真理をブルジョア経済の範疇が保有しているとしても、これは *cum grano salis* [まったく限定された意味において] でとりあげねばならないとしたのである。ブルジョア社会が古いものを、発展しきってすっかり弱ったカリケーチャーばりなものとして含むものの、いずれにしても本質的に変化をとげた形態である。

抽象的独自があらわれるのは、一つのシステムがもう一つのシステムに転化する史的過程における抽象的普遍にたいしてであり、いずれも抽象として同じ範疇である。二つの具体にたいする抽象的普遍（封建社会の剰余生産物の生産、資本主義社会の——）は同時にこれに照応する抽象的独自〔の範疇〕（封建地代、剰余価値）の

* 現実 (реальный) ということがあいまい。あるいは1) 実在を、あるいは実在ともども理論にも内在する運動バネとしての発展因〔真実!〕、したがって2) 科学の性格を、あるいは3) 眼前の表象を、あるいは下向の起点としての4) 具体をそれぞれ、または一括して意味している。この場合、1) ならば思惟に抽象的モメントが起点になるという説論が生じるし、2) ならば、抽象的モメントが上向の起点になりえず、したがってマルクスが唯一の科学的方向だといった立言を否定せざるをえなくなるし、3) であるならば、トートロジーであるし、4) ならば、定義の問題になることだろう。

**この符号は、ことわっていないが、具体と抽象をあらわすものだろう。

本質的モメントである。一つの具体全の転化=移行（封建社会から資本主義への移行）とともに、一つの具体全に内在する抽象的独自（たとえば封建地代という範疇）は、ある特殊な属性を失い、もう一つの具体全の特殊な属性（たとえば剰余価値）をおびて発現する。

封建社会に固有なシステムとして現物構造と商品関係システムから成りたつ組織のもとにあって、後者が封建社会の商品生産である。二つのシステムの敵対は後者に再現して、その商品生産にも普遍と特殊独自が伏在する。〔商品生産のこの独特な二側面が社会そのものの二つのシステムとして現象するといったほうが正しいであろう〕。2システムの間には敵対的矛盾があるものの、相互の関連や利用を排せず、封建社会は、あるときは商品関係を利用してみずから発展するし、あるときは阻止して敵対関係におちいる。この史例は枚挙にいとまがない。この商品生産は、生産手段、労働力、労働生産物の所有主たる自由な小商品生産者のものであり、賦役農民、手工業者、封建地主、ギルド組織の商品生産である。ところで、最高の商品生産といわれる資本主義社会は、封建時代の商品生産から生じるにせよ、たんなる商品生産でなく、社会システムとしてほかに共通な一面的関係、社会形態をば封建社会から相続している。共通な関係としては分業、協業、剰余労働などがあげられよう。しかしこの関係は特殊な形態であらわれ、それぞれの社会にとって抽象的モメントとなるから、資本主義でもそれが相続したほかの特殊な形態をおびて現象し、それ自体は資本の抽象的モメントにとどまる。単純商品関係そのものから資本主義は発展しえない。この発展があるのは、商品経済を貨幣経済に高め、貨幣形態ですべてをいりどり、商業資本や高利貸資本を生みおとし、一定の商品生産をある程度富まし、他の生産者を貧民に転化するとき——この場合だけである。マルクスがいうように、貨幣や富の存在だけでは資本主義になることはできないが、反対に、自由な労働者と資本をもって自分の歴史に終止符をうって、古代ローマやビザンティンは新しい歴史をはじめた。この分解は工業の発展をもたらすかわりに、實際上、農村による都市の支配をもたらした。歴史的にも単純商品経済はそれ自体、資本制に転成しないのは、たんに封建社会から商品の一般的範疇のほかには封建制の一般的範疇をうけつぐということだけによるのではなくして、直接に、奴隷労働から賃労働は発生しないからだ。

自然史的進化における農奴労働と地代関係は単純商品生産と資本制生産を結びつける唯一の必然的な歴史環である。たしかに、資本主義は封建制によって準備されるけれども、商品労働の諸関係を通してだけではなくして、搾取関係を通して生

れてくる〔資本主義を商品関係による人びとの平等なかわりあいと、Pm の有無をめぐる上下関係の発展的交点として位置づけるようだが、これは正しく、資本の成立条件である二重の自由として再生する*。この二つを抽象と具体全あるいは根基と基礎として関連づけるのではないか。そうだとすると、正しい把握である。〕

たとえば、“資本論”でマルクスがいうように、二つは二重の意味の平等、つまり連合所有としての平等と個人的非所有としての平等であり、共同体所有者と私的私所有者としての平等を特徴とする原始共産とはまさに 180 度の転換をとげているといえる。この二重の平等は共同所有と計画化に連続しているのはみやすい理だ。

賦役地代が生存最小限をうわまわる生産物剰余であり、やがて資本の自由のもとでは、利潤となる萌芽である。地代関係から資本制関係への転化についてマルクスのいうには、貨幣地代は自由な農民土地所有とか資本生産方法にみちびくし、その地代のもとでは慣習法関係を契約上の純粋な関係への移すことが必要であるが、ほかの有利な一般関係に支えられると、この移行は古い農民所有を漸次収奪して資本制借地契約にも利用されるのだと。移行の内的可能性、いや必然性は封建制による資本主義の準備といった根本問題である。この移行が個々のケースでどのようなのが大切なのではない。大切なのは、地代関係とその発展が史的計画として産業資本や資本制生産方法の発展の前提にいかに関わったかということである。資本の歴史・発生は一般法則から脱しえない。各システムには他のシステムが先行、その

* ちなみにいえば、資本の地平をこえた社会についていうと、人びとの生産連合——たんなる生活上の連合にとどまらず、生産手段に結びつく物的生産における連合——と労働者の専一ヘゲモニー状態、生産手段にかかわっていうと、連合単位の共同所有とその個人的非所有の普遍化、人びとの社会状態でいえば、株主と労働者、この経済諸関係を集約した範疇でいうと、共同剰余（特殊な配当）と費用（同じくこの社会に特有な支出の回収形態）として特徴づけられる。

社会主義経済の細胞状態は株主が同時に労働者である状態。いつの時代でもあった連合所有は労働者の単一階級支配にたいして、かれの表現では、基礎と根基の相互関係にたち、この同時成立は社会主義経済だけである。連合所有はすでに、封建時代の藩連合ばかりか、資本主義の平均利潤の現象において共同剰余価値の連合資本による個別再分配によみとれるが、ここには労働者は再分配に加わっていない。逆に、労働者が確実に自己回収できるのは、資本関係の外においてであり、したがって連合範囲外の単独の小経営にすぎない。費用から共同剰余へ、労働者の自己回収の連合化——これはまさに新社会における抽象から具体への上向法的史筋をなすだろう。共同剰余を核とする連合所有は、具体全として、費用がうつしだす共同労働者の単一支配という抽象が内的論理を通して展開しよじのぼっていった結晶であり、再現というべきだろう。

先行するものによって、生産力の点ばかりではなく、ある程度は生産関係をさえも準備するものだから、問題を一面的に考え資本制方法が単純商品生産だけから生ずるのであって、封建制は外的条件として商品生産の発展を阻止しとどめるのだと考えてしまうならば、唯物論的発生史は理解できない。〔抽象から具体へという一面的関係の本質理解は、逆の具体から抽象へ、また具体全からもう一つの具体全への方によってうらうち補足されねばならないというのである〕。

相異となる抽象的独自を統一するモメント（封建地代と剰余価値が同一であることとのモメントとしての剰余生産物一般）こそまさに同一性のモメント、つまり史的発展なり、一つの具体全からもう一つの具体全に転化することにより、抽象的普遍のモメントを形成する。こうして、一つの具体全から、もう一つの具体全に転化する場合におけるモメント、つまり成果としての抽象的普遍の内容と形態と、一定の生成した具体全のモメントとしての抽象的普遍の形態と内容とを区別すべきである。前者は、二つあるいはそれ以上の具体全にとって抽象的普遍であるのにたいして、後者は一定の具体全のなかにおける抽象的普遍であって、ほかの具体全にたいしては抽象的独自になる。新しい具体全がほかの先行する具体全の抽象的独自というモメントから発展するものだとすれば、その全体は固有の抽象モメントとしての抽象から生じる理由はなくなるわけである。抽象から具体への思惟の運動方法を問題にする場合には、起点の抽象は、一定の、まさしく一定の具体全の（一面的関係）であり、抽象的独自である。新しい全体がほかの具体全の抽象的独自から生じるかぎりでは、本質上、そこにあるのは、先行する具体全をもって独自のモメントが新しい全体にまで発展する過程、つまり一つの具体全からもう一つの具体全への移行である。

たとえば、どんぐり実の萌芽は、これを生みだすかしの木と直結しているけれども、かしの木というこの具体全の抽象モメントとしてあらわれる。実が成熟しかしの木からはなれてしまうと、それはかしの木のモメントたるをやめるし、それとともに、相互作用もなくなり、具体全つまり独自の抽象モメントを有するシステムになる。しかし、この相互作用こそどんぐりの生命である。ここでは抽象的にのみ、外的形態としてだけ、どんぐり実の萌芽という抽象は成熟・分離したかし木という具体全に転化する。現実には、過程の内容としていえば、成熟したどんぐりの実が現実の起点として有するのは、自己みずからのではない抽象的モメントではなく、生きた具体全としてのかしの木そのものである。

一定具体全の抽象はこの全体からきりはなせず、それから独立した別の存在をも

ちえない。が同時に、抽象的モメントのままにとどまりえない。仮りにきりはなせたり独立たりうるならば、そのものは具体と相互作用できず、したがって抽象の質を失ってしまい、それ自体、新しい具体全になってしまうだろう。

したがって、具体から抽象への思惟の運動方法は一義的に理解してはならない。一面、この方法は一つの具体全からもう一つの具体全にうつる現実史的発展過程のモメントの一つを反映する。つまり、史的継承のモメント、この発展・変化が同一性だというモメントを。だからして、これは、現実史過程を媒介をとうして迂回的にうつしだす抽象から具体への思惟の運動方法と異っている。他面、抽象から具体への運動方法は一定具体全の弁証法をうつしだし、具体全がその諸モメントで止揚されていく過程を反映する。したがって、この場合は、具体から抽象への思惟の運動方法は直接に具体全の生成史をうつしださず、それをまわり道をしたものとしてうつしだす。〔しかし、これは理論構成は上向であり、現実史の歩みは下向だという前提がやはりあって、しかも両者の照応関係をみとめつつ、このうえで、後者にとっての上向が直接的でなく媒介的であり、下向も媒介的となるといっているのではないだろうか。〕

ある具体全からもう一つの具体全への移行は独自のシステムをなす生成過程を通して実現されるのであるが、そのシステムのモメントは二つの具体全である。1.消滅しているが、なお消滅しきっていないもの、2.出現しているが、まだ生成しきっていないもの。一つの具体全からもう一つの具体全への転化や二つの具体全にとっての抽象的普遍に関しては現実史的過程で、抽象に関しては生成した一定具体全の現実生活でその起点となるのは具体全であり、これこそ認識の起点なのである。

ところで、現実の具体全から抽象（一面的関係）に運動していくにあたり、この認識は科学以前なのか、それとも科学的なのか。これはひとえに、思惟運動のどの段階に人びとがいるかに依存する。認識のはじめに人がいるとすれば、具体から発足して個々の表面上のモメント（現象）に、一面的な属性にたちいたるけれども、この属性もある種の抽象——抽象的独自であり、その背後に具体全を保有する。ここでは人は科学の前扉にある。ここでは現象の叙述が支配的であり、外的現象を一般化するのが課題である。一般化は思惟の果実であり、その内容はさまざまな現象とくらべて、異となるものと共通なものを区別する点にある。が、現実の運動は人びとの思惟する外にあって、現象の識別を内容とする一般化にとっては、それが共通なのか異質なのかはさしあたりどうでもよいのである。このかぎりではやはり科学以前。この一般化はといえば、現実の関連を反映することもあるが、そうするのに偶

発的なもの、虚偽的なものも少なくはない。

だがしかし、ふかいかあるいは表面的かはともかく、個別法則（価値法則、貨幣流通法則、剰余価値法則その他）の発見は具体から抽象にほり下げていく過程で可能になる。けだし、現実にとっての抽象的モメントとしての法則の存在自体は一定関係において具体全の運動する結果であるからだ。およそ一切の法則は本質、抽象的普遍である。いろいろな形態をある統一体へ還元したり、あるいは具体全を多少とも普遍的なものに帰着したりすること、つまり抽象的普遍の確定は研究者の頭の中にのみ存在するのではなく、また思惟の結果であるだけでなく、現実的具體全のモメントそのものの結果でもある。それを論者が明らかにするか否かにかかわりなく、この普遍は客観的に存するのであり、その相互作用や相互生成によって鮮明になる。

この法則は、直接には検討される一面的な関係の法則として、具体全の抽象的モメントとして固有な内容を有するだけに、完全には認識できかねる。それにしても、科学的認識の進展途上にあることにはかわりない。こうした現実の抽象だけが具体全のいっそうたかくそしてふかい認識の起点たりうるのである。

抽象から具体へを唯一の科学的方法だと考える人、具体全をまさに全体として認識する一つの可能な方法でなくじかに唯一の方法だと考える人——かれらは論争の真只中でさえも論理的矛盾にきがつかない。かれらのいうには、具体全はたんなる抽象であるから、これをもって展開をはじめるとはゆかないし、具体から抽象へは、その所産=成果が表面上にして抽象的なものだけに、非科学的な認識しか生みださないのである。問題は、抽象から抽象へたち向うにしても、抽象というその起点がどういうものか、つまり科学的思惟で認識された現実の抽象なのか、それとも抽象という概念なのかという点にある。後者だというのだが、それではこの概念は科学的たらねばならぬ。しかもこれは科学的に正しくないとかれらのいう具体から抽象への所産の外にでてこようはずはない。そうならば、起点の抽象ともども、抽象から具体への上向は科学的でなくなるのではないか。その場合、起点の抽象には次の二つの可能性がある。イ、認識のはじめには存在しようはずもない具体全からは発足できぬとするならば、明からさまにたんなる抽象、無内容な抽象からはじめざるをえない。そうでなければ、ロ、具体から抽象への運動の結果としてしかでてこない概念としての内容をもった抽象をこっそりととりこむことだ。無内容な抽象の非有効性と内容ある抽象の密輸入。いずれにしても、問題の解決にはならぬ。すなわち、抽象から具体への思惟の運動は、抽象という概念から具体という概念へ

の運動でなく、科学的思惟が認識した抽象的現実から発して、具体全すべてのモメント関連を認識し、これにもとづいて具体全という概念を再生＝構築していくことへの運動だということ——これが肝要な点であろう。

抽象から現実の具体全への方法が現実の反映だといえるためには、この方法は現実具体全への生成過程を直接にうつしだす手だてとしてではなくて、既存の具体全の有する内的弁証法がもう一つの側面を直接に反映する、一定の具体を認識する方法としてみとめるかぎりにおいて必要である〔抽象から具体へを認識の方法としてだけのものとしてみるのだろうか?〕。具体全の生成を直接に反映するというふうにと考えると、神秘主義におちいる。というのは、抽象は具体の外で、これにさきだうて存在するかのようになるからだが、あえて具体をぬきにして抽象が存在するのだとそもそもいえるのは——ある具体全の抽象が抽象的普遍か抽象的独自か、それとも抽象的単一かを問わず——思惟の概念としてであり、現実の抽象としてではないからだ〔抽象から具体への方法を理論構成では無条件にみとめるが、現実の歴史についてはあいまいであり、とくに観念の歴史ではそうである。支配的でなく一面的であり、そのかぎりて抽象的モメントとしてであるが、抽象から具体への上向は観念の歴史をも含むすべての現実的歴史に伏在するものと考えたい〕。それゆえに、上向を現実の生成史をうつしだすと考えてしまうのは現実の具体全が概念から発生すると宣言するのにひとしい。だからこそ、マルクスも具体をわがものにする一つの手法として、上向を考えたゆえんである。また若干の論者にしたがえば、抽象が具体の外では存在しないとみとめるものの、この上向法をマルクスとのとはまるでちがったふうに解釈し述べる。マルクスがいったのはこうである——論理的なもの(概念展開の論理的一貫性をも含めて)はうつしとられた歴史である。上向も科学の理解を容易にする主観的手法ならず、概念の運動のうちに自己発展の過程を、具体的システムの生成過程を表現する唯一の論理的形態であるのだと〔マルクスをこうひき合いにだす著者ははたして、その通りに解釈しているだろうか。むしろ、動揺していてあいまいな点が多い。上向が現実の具体全をうつしだせるのは、トロネフのいうように、思惟方法や概念構成にとってのみゆるされた仕方だからではなく、むしろこのいずれをも含んで、現実や概念の目立つ支配のモメントとしてではなく、抽象的だが本質のモメントの動きに着目してとらえるからである。〕

具体から抽象への運動の発端で抽象が認識されるものだとすると、一体この運動の任務はどこにあるのかと問われねばなるまい。実際この任務は小さくはない。つまり具体から抽象へ推移するにあたって、はじめに認識する必要のあるのは、具体

を、全体としてではなく、その孤立せる個別の側面なり属性としてとらえることである。この方法によって具体全の統一的認識とか、さまざまな形態を一面的関係に表現する多少とも普遍的なものの統一還元が可能になるわけである。そして、この方法をもってすべての抽象モメント関連の性格・構成をとき明かし、具体全の統一を分析的ならず発生的に、つまり多少とも一般的法則や範疇から具体的形態やモディフィケーションをば、内在矛盾の解明とこれを媒介する事情の分析にもとずいて、結論づける方向でとらえていこうとするのである。思惟の上向法モメントになるのはこの還元と総合であって、この方法はがいして孤立した個別モメントの全体よりもいっそう高い認識の形態である。一般的議論から個々の事実への思索の運動は、とくに還元でなく、一般的法則・範疇から具体的形態をひきだすのであるが、中間項を研究しつつこれをおこなう。一定の仕方で相互に結びついた部分よりおこなう全体の再生は、たんなる総合ならず、内的矛盾の解明とその発展の追求にもとづいて具体全の一面的関係を内的に整序する必然性を鮮明にすることである。上向で認識できるのは具体全を全体としてのみならず、同時に抽象そのものに関する知識をも含めてである。その知識というのは抽象と他の抽象との（全モメント内の）関連、また、この抽象と認識との関連が可能かつ不可欠であるということであり、抽象自体を完全に抽象として認識することである。だが、たとえ発生的方法を使用したとしても、抽象に関する知識をマスターできなければ、形式的にとどまってしまう。順序としては最初だとはいえ、抽象は、内部矛盾と中間項を通してひきだされるのでないと、形式的ないつわりの起点になる。マルクスがリカードを批判していった文節は印象的である。曰く：リカードが批判されるのは、一面、抽象が不十分なことであり、他面、現象形態を普遍法則の直接じかの確証なり表象として理解している点である。このためにこそ、形態の発展を理解しそこなった。このモメントの最初の点では、かれの抽象はきわめて不十分であり、第2の点では、それ自体虚偽でしかない形式的な抽象であったのだと。

“資本論”の商品生産は上向の抽象＝起点であるが、そうだからといってゾムバルトやシュミットのいうように、価値法則は、経験的事実でなく論理的事実だとか、理論上の必要なフィクションであり概念にすぎないのだということにはすこしもならない。抽象的に商品生産を論じていても、資本制社会の現実の諸関係が考慮されているのである。商品生産が理論上の抽象だけではなく、實在の抽象だというのは、それが1. 資本制の實在する側面の一つだということ、2. 資本主義の普遍的属性、3. この普遍的関係を分析して、任意の商品生産形態の實在的に本質的な特徴を解明

したこと——こうした諸点で正しいものと考えられる。一面的関係たる現実的抽象としての商品生産は、いくつかの諸社会に存在する普遍的なもの、本質だけではなく、独自の特殊具体的な商品生産であり、そのつど一定の社会で存在する形態を保有する。本質的特徴と特殊な独自性において一定社会の史的属性、その社会の基礎として、商品生産は具体全としてのこの構成をもつ。何となくマルクスがいうように、交換行為は一定の生きた具体全の抽象的一面としてのみ存在するのであり、多面的なシステムとしてではない。具体全が一面的関係の発展する基礎であるように、資本制社会はこの商品関係の基礎である。しかし逆に、資本の範疇は具体全としての資本制社会においては、それとの相互作用を通して消失してしまい、そのかわりに生きた全体のオルガニズムとして再生する。この再生を促すのがこの社会の根因としての抽象である。〔制約する前提なり母胎、一口にいつて具体全を基礎とよび、逆に決定する運動因なりバネを、抽象として根因と名づけて、かれは両者を区別しているようである。〕二面的作用は具体全で手にとるようにはっきりあらわれる。それは基礎であるとともに、基礎づけ、根因によって基礎づけられたものである。だからこそ、マルクスは次のようにいうのである。すなわち、資本制社会は具体全として固有な一面的関係、価値、商品生産にとり基礎であり、現実の起点である。抽象的モメントは、価値法則をも含めて資本主義社会システムにとって根因であるのだと。このようにして、資本制社会には、根因つまり基礎づけの役割だけではなく、基礎の役割もある。基礎からはじまり根基で終わるのがすべての運動の真相。この運動は否定の否定という重要な側面である。抽象から具体への思惟運動の方法は価値やその法則が発展を通して他の範疇に発展していくといった逆運動をうつしだし、具体全としての資本制社会を再生するものである。価値を属性とする商品は、一定社会にあっては、現実の起点ならずして、思惟の起点にすぎず、現実には、本質的に復帰点であり、逆運動の起点である。〔实在の現実は下向が、上向は思惟にそれぞれ特有なとでもいうのか!? そうでないとする、次の仕方しかないだろう。すなわち、商品生産という抽象的モメントに限定したその筋の全面展開をフォローする上向と、これに重なり階級関係が交差するのであって、その階級関係は上下構造であるが、発展は個別に分解する方向をたどり、下向の軌跡をえがくのであるから、展開は下向を前提とした上向であるといえる。但し、上向＝叙述の等置を批判する人もあるが。〕

上向法が社会主義経済の構成に役たたぬとほとんどの人が考えていた一時代があったけれども、現在ではこれと反対の見方が支配している。更には、そのはてに

経済学のすべての方法を一律に、その手法の一つにすぎない抽象から具体への方法に還元してしまっている。この方法こそ歴史的方法とは別な唯一の理論的方法と考えられているが、ここで歴史的方法とは史的過程のたんなる叙述の意である。しかし、経済学の真実の方法は唯物弁証法であり、それぞれこれを構成する手法の一つ、つまり区分された歴史的方法と論理的方法よりも内容上ずっとゆたかであり、いっそう複雑にして、一義的ではない。

第1に、一面では、歴史的なものと理論的なものが区別できる。すなわち、現実史過程として、一定現象（具体全）の生成として、はたまた開花と凋没の各時期での生活活動（内的弁証法）として、歴史的なものがある。これに反して論理的なものは現実史の理論的弁証法的反映である。他面、論理的なもの（理論的なもの）が客観世界の発展する現実史をうつしだすかぎり、弁証法はすべて歴史的方法と合致する。つまり広義では論理的なものと歴史的なものは一致する。

第2に、狭義では区分される歴史的方法と論理的方法が研究方法をなす。しかし、この区分は絶対的に対立するわけではない。たしかに、歴史的方法は生成・発展・死滅の全史で現象するが、たんに史実記述とか経験的方法とは無縁である。というのは、それ自体が論理的方法として、内的可能性と必然性の、生成・発展・死滅の内的弁証法法則を理論的に解明することにあるからだ。この方法は二つのアスペクトから解明できる。1. たとえば、各国における研究方法として、歴史のジグザグ、内的必然性の現象形態などをフォローする。2. とりあげる対象は同一の現実史ではあるが、すでに偶然的なものをでなく、法則や必然性と一致する純粋形態の歴史を問題とする。2. は1. から派生して、原始共産体、奴隷制、封建制、資本主義といったふうに洗練した形での人間史発展をえがきだすが、これは、史的抽象であり、具体的に、社会史を科学的に研究した結果である。

第3、最後に、生成した一定社会やその経済構造のもつ内的弁証法を解明する狭義の論理的方法をひき出す必要がある。このなかには抽象から具体への方法と逆の具体から抽象への方法の二つがある。それは相互に対立するものではない。

1. 生成した社会の内的構造はつねに生成・発展・死滅の現実史過程の所産であるがために、構造の解明もシステムと範疇の歴史性の解明になり、論理的なものは修正された歴史的なもの（修正された生成史）である。この修正は生成の法則によってなされるのではない。したがって、論理的方法は直接ならず間接に社会生成史をうつしだすのだ。2. 生成した社会は、先行社会の所産にして新状態に転化する可能性と必然性を含むのであるから、その構造の解明は先行社会を理解するためのか

ぎを、他面では、この社会自体の過渡性を示すのである。3. 生産関係の内的システムの解明は、現実生活や各時期の社会機能の解明であるが、この社会の廃絶を意味しない。現実史は、構成モメントの相互関係で生じるのだから、これを修正したものとして論理的なものはある。

資本制経済に適用できる弁証法はひろくかつふかい意味で歴史的方法であり、この方法で支配的なモメントとなったのは独自の理論的方法としての抽象から具体への方法である。狭義の論理的方法と歴史的方法は代替していて、マルクスは論理的方法のあらゆるところで、資本制の現実的生成史の材料を用いた。